『人文学報』第114号（2019年12月）
（京都大学人文科学研究所）

あ　と　が　き

昨年2018年は，1858年に日仏修好通商条約が調印され，日仏交流が始まってから160周年，そして最初の姉妹都市提携が1958年にパリ市と京都市の間で結ばれてから60周年という記念すべき年であった。通商条約調印の10年後の1868年，フランスから一人の青年が来日した。その青年の名前は，マルコ・マリー・ド・ロ。弱冠28歳であった。フランス北部に位置するノルマンディー地方ヴォソロール村出身で，貴族の次男であったド・ロは，まだキリシタン弾圧の厳しかった時代に，死を覚悟して布教のために来日したという。1879年に主任司祭として長崎県の外海（そとめ）に赴任してから，1914年同地に骨を埋めるまで，外海の人々の信仰の柱となり，その生活改善に心身を捧げた人物である。

本序論を書き始めていた2019年10月，編者の一人である竹沢は，とある学会の前日に，長崎県の外海地方を訪れた。ド・ロという名前を初めて知ったのは，『ド・ロ版画の旅』（郭南燕編，2019）に掲載された知人の論文を読んだ時であった。同時期，学内の知人からも，次に長崎出張の機会があれば外海のいくつかの資料館が面白いだろうと勧められてもいた。

外海は，厳しいキリシタン弾圧時代でも，多くの住民が潜伏キリシタンとして長く信仰を守り続けた長崎県でも屈指の村である。だが，その切り立った斜面は稲作には適さず，漁で夫を亡くした女性たちも多く，人々は困窮した生活を強いられていた。その地にド・ロ神父は，自ら設計した教会をいくつも建て，信者のために高品質の柱時計やハルモニュウム・オルガンをヨーロッパから取り寄せ，救助院には，糸車やメリヤス編み機など様々な機具を購入して，そこで算術から織り布，編み物，素麺やマカロニ，パン，醤油作りなどさまざまな技術を伝授した。耕地に設置した作業場では，農耕や家畜飼育のノウハウを教えたのであった。その資本は，母から渡日の際に譲り受けたという私財24万フラン（一説では今日の約10億円に相当）を投げ打ったものである。フランス革命を経験した彼の両親が，貴族がどのような逆境でも生き抜くことができるようにと幼少期からさまざまな技術を教えた。その技術が，飢えと貧困からこの地の人々を救うことになったのである。

地元の人のド・ロ神父への感謝と敬愛の念は，外海のいたるところで感じられる。出津教会を見下ろすように建てられたという墓には，新鮮な花が手向けられていた。外海地区（人口約3,500人）とヴォソロール村は，神父の没後から100年以上が経過した今も交流を続けている。ヴォソロール村には「外海広場」が設置され，外海には「友情（アミティエ）の像」が建立さ

れている。東日本大震災の後には，ヴォソロール村から義援金が送られた。外海には，フランスの国旗を模した赤，白，青の3つの橋が架けられ，街に彩りを添えている。日仏の交流が，京都とパリのような華やかな都市の間だけではなく，外海とヴォスロールのような小さな町や村単位でも続いていることに，両国の絆の深さが感じられる。

当初は，村人にとっては，宣教師とはいえまだまだ見慣れぬ外国人であり，さぞ差別や偏見も経験したことであろう。ド・ロ神父の物語は，一人のフランス人が海を越えて日本に到来し，カトリック教や多くの技術を伝播するとともに，村人の信頼を集め，人々の生活や価値観，人生観を大きく転換させることに成功した例である。

本特集号のテーマ「人種主義と反人種主義の越境と転換」は，こうした日仏の交流と無関係ではない。人種に関する学知や人種主義的思想，また反人種主義的な思想や運動がいかに国境を越えるか，あるいはその後いかに転換したかを研究することは，おのずと私たちを一国民国家内に閉ざされた研究から，国境を越えた広い視野でアプローチする研究へと導いてくれる。地域だけではなく，ディシプリンも越えてパリと京都で重ねてきた議論からは，互いにおおいに啓発された。

さて，なぜフランス国立社会科学高等研究院・TEPSIS（フランス研究庁研究費）と人文科学研究所の人種研究共同研究班が国際共同研究を始めるようになったのか，その経緯を簡単に記しておこう。数年前，それ以前から知り合いであったジャン=フレデリック・ショブ氏から，われわれはいまアメリカなどの英語圏よりもアジア，特に日本でどのような研究がなされているのかに興味があるので，一緒に共同研究を始めないかと打診を頂いた。2017年1月に代表者（竹沢）がパリで開催されたシンポジウムに招待されたのち，2017年3月にTEPSISと人文科学研究所の間で人種化に関する共同研究と学術交流を行うことを明記した協定を締結した。2017年11月に京都で，また2018年3月にパリでそれぞれ2日間にわたる非公開の研究会を行い，議論を深めたあと，2019年5月に日仏同時通訳を入れた国際シンポジウムを東京にて開催するに至った。シンポジウムには，2日間で延べ222人が参加し，質疑応答も活発に行われた。

最後になったが，シンポジウムで，的確なコメントで議論を盛り上げてくれた平野千果子さん（武蔵大学），松本悠子さん（中央大学），坂野徹さん（日本大学），大橋順さん（東京大学），池亀彩さん（東京大学），宮島喬さん（お茶の水大学名誉教授）に改めて感謝申し上げる。また京都での研究会では，松本さんや徳永悠さん（京都大学）にも討論に加わって頂いた。

本号の実質上の編集は，ひとえに科研研究員の芹澤隆道さんの尽力によるものである。彼の的確な校閲によって本号の諸論文の質が向上したことは間違いない。残る不備は日本側の編者である竹沢の責任である。シンポジウムを円滑に運営してくれた徳永悠さん，おびただしい量の事務処理を支援してくれた教務補佐の吉村季利子さんと研究室秘書の中村芙美子さん，大学

院生でオフィスアシスタントの矢持力さん（ホームページ等担当），またその他の補助をしてくれた山淵あいりさんらの協力がなければ，シンポジウムは成立しなかった。上記の方々に謝意を表したい。

2019 年 10 月

日本側研究代表
竹　沢　泰　子